

淀川百五十年史

序文

近畿地方整備局長 齋藤 博之

本書「淀川百五十年史」は、明治7年（1874年）に着手した淀川修築工事（試設の水制工から）を起点とし、令和に至るまでの150年にわたる淀川水系で実施した施策の変遷と成果を体系的に整理・記録したものである。本書には、行政機関、技術者、研究者、地域関係者が共有すべき知見が集約されており、今後の淀川流域の施策の方向性を示すことを目的としている。

淀川の流域は、三重、滋賀、京都、大阪、兵庫、奈良の2府4県にまたがり、長い歴史と豊かな自然環境に都市・産業が立地している。流域内人口は1,200万人を超え、関西圏の社会・経済・文化の基盤を形成する重要な水系である。

古来より、淀川の水は地域に住む人々に利用され、川の歴史は人類の歴史であり、淀川を取り巻く自然環境の変化により人々の生活は変化し、近畿・京阪神地域の社会も進展してきたといえる。明治期には、オランダ人技師ヨハネス・デレーケの指導のもと、近畿・京阪神地域の経済・物流を支えるため、水制工による舟運事業が行われ、それが近代的な河川改修の始まりであった。その後、後に初代内務省技監となる技師沖野忠雄の指導のもと、新淀川開削など、近代的な治水技術を更に発展させ、昭和期には基本高水流量の設定、ダム群の連携操作、新河川法への改正等を通じて、科学的かつ制度的にも安定した河川管理が進められた。また、高度経済成長期には、発電・農業・工業・上水道等の多目的利用を図る水資源開発が本格化し、天ヶ瀬、高山、日吉等の主要ダムが整備された。平成以降は、環境との調和を重視した「多自然川づくり」が基本となり、また、淀川水系流域委員会において、地域住民の意見と真正面から向き合った取り組みを行ったところである。

近年は、気候変動の影響により豪雨や台風が激甚化・頻発化しており、治水対策の推進のため、気候変動を踏まえた河川整備計画の変更や、流域・地域と連携した流域治水の取組を進めている。さらに、防災力を向上させる新たな取り組みとして、舟運の活用にも取組、観光や地域活性化の観点からの利活用にも寄与し、地域の安全と魅力を両立させることを目指している。

150年という長期にわたる施策の蓄積は、単なる歴史的記録にとどまらず、今後の河川行政の企画・立案・評価に資する貴重な資料である。本書が、流域全体の安全・安心の確保、環境との共生、地域の持続的発展に向けた施策の検討に広く活用されることを期待するものである。

令和8年2月